

南海進出は鄭和、永楽帝時代からの DNA か

歴史学者、元北海道教育大学教授
宮崎正勝

はじめに、

人類が進化をしたのは東アフリカの大地溝帯です。アフリカから歴史が始まります。ところが 4 回にわたって氷河期が訪れます。非常に寒くなりましたので、もう少し北の方へ行けば楽に生活ができるのではないかということで、波状的に人類の移動が起こります。

今から一万年ぐらい前になりますと、かなりの人たちが地溝帯から抜け出して生活するようになります。大地溝帯の北の出口が現在のシリアとかヨルダンです。新しい土地に行ったもののそこは狩猟が困難な大乾燥地帯でした。そこで、渴きとの戦いが展開されて行くことになりました。その段階で人類を救ったのが麦です。麦は乾燥に強く栄養が豊富でしたから、麦によって多くの人々が救われることになります。

人口が増えると大河の流域に人々が集まって住み始めます。ナイル川の流域のエジプト文明、チグリス川とユーフラテス川流域のメソポタミア文明、それからインダス文明と三つの「麦」文明ができます。しかし東の方に行けばもっと良い土地があるのではないかと、移動がさらに続けられます。黄河の流域が農耕がしやすいところでしたので飛び地のように異色の文明ができました。それが中華文明とか黄河文明ということになります。

黄河文明は粟（あわ）を主体とする文明で、三つの文明とは全く性格が違いました。粟というのは非常に粒が細かいので、食べる時に麦とは違って、お粥にして食べます。お粥は手で食べるわけにいかず、スプーンを使いました。そのほかの食べ物は箸という二本の棒で食べました。エジプトとかメソポタミアとかインダスでは手で物を食べましたが、中国は違ったのです。それに見られるように中国の社会は異質であったということになります。

西アジアでは穀物、麦を作れない牧畜民が多数居住しました。その人たちに麦を供給するところから商業が盛んになります。一方中国は、エジプトと同じで純然たる農業社会です。社会の組み立て方が違ったのです。西アジアでは河口部分まで人々が住むようになり治水灌漑が行われましたが、黄河は黄土と呼ばれる細かい土が川の水に混じるために河口の流れが緩やかなところに来るとそれが堆積します。川底がだんだん高くなって 2 年から 3 年に一度大洪水が起きました。流れが著しく変わる程の洪水であったために下流はあまり使えません。そこで黄河文明は陸に閉じ込められた文明になります。西の方ではエジプト文明が地中海との結びつきが強く、インダス文明とメソポタミア文明はペルシャ湾との結びつきが強いのですが、中国の場合には海から切り離された内陸文明であったということがここでいう DNA につながって行きます。つまり、海を知らない文明、図体は大きいのですが他の世界を知らない、そういう文明になって行きます。

1.

中国の社会を見ますと、黄河の中流域に外敵を防ぐための囲いを持った集落が作られてそれが連合して国が作られました（邑制国家）。中国の最初の王朝は殷です。殷は宗教を利用して多くの村々を支配しました。国の支配者は神官だったのです。当時の殷では太陽が 10 個ありそれぞれに甲乙丙丁・・・癸の名前が付けられました。この 10 個の太陽を「10 干」と言います。殷の王は 10 の太陽の子孫であるということになっていました。神の意志を知るために、太陽の 10 個に合わせて先の 10 日間毎にどのようなことが起こるか、不吉なことが起きないかを占いました。牛の肩甲骨や亀の腹の甲羅に浅い穴を掘って火にくべるとそこに起裂ができ、それが漢字の「卜」です。またその下に骨を意味する「口」を付けると「占」になります。そういう社会でした。

また占いの結果を骨の上に記録するために漢字の祖先である甲骨文字が生まれました。だから我々が使っている文字は宗教文字なのです。エジプトの文字も宗教文字になります。宗教文字とか政治的な文字は難しければ難しいほど良かったのです。そこで一般の人には読めない、かなり複雑な文字が考えら

れました。そういう文字を使っている人たちは珍しく、その意味で漢字は特殊な文字なのです。漢字の字数は5万以上あります。台湾の繁体字というのがありますが、一般の人には分かりにくい大変に複雑な字形になっています。

世界に広く伝わって行った文字は商人の文字です。商人がたくさんの人たちと取引をするために、例えば文化や言葉が違う人たちと意思疎通するために作られたのがアルファベットです。そのアルファベットはシリアとレバノンから始まり、レバノンから地中海に広まっていったのが東ヨーロッパとか西ヨーロッパの文字のもとになります。それからシリアの砂漠の商人、アラム人が使っていたアルファベットがやがてペルシャの文字とかアラビアの文字のもとになります。それがシルクロードのソクド商人に伝えられて、今度は中央アジアの遊牧民の間に文字が伝えられ、たくさんの文字が派生してくることになります。そのようにして世界中の文字ができました。

中国の文字は宗教文字でありまた官僚文字であり極めて特殊です。中国は言語的にみるとまとまりのないところで、同じ中国語でありながら発音が全く違うのです。今でも北京語、上海語、福建語、広東語は話し言葉では全然通じません。漢字の文書があるから広大な中国が一つにまとめられるわけです。漢字を操ったのは官僚という特権階級でした。庶民の分からない呪文みたいな文字を官僚たちは操って自分たちの都合の良いように政治をしていく、そういう伝統がありました。ですから官僚でないと中国全体の事が分からない。漢字が読めて使える人たちは特権階級だったのです。文字が画然と「官」と「庶」を分けたことが、中国理解の第一です。

2.

やがて周という強力な武力を持った勢力が出てきて殷を倒します。でも周の王は普通の人間ですから神としての支配ができません。そこで一つの理屈が考え出されました。北極星のそばを見ていると紫に微かに光る天の神（天帝）の宮殿があります。本当は見えませんが、そう言われればそんな気持ちにもなります。これを紫微宮（しびきゅう）とか紫微垣（しびえん）と言います。そこに住んでいる天帝という神はこの地上からあまりにも遠いところにいるので、自分の代行者を選ぶことにしました。形としては、人格的に優れている人を神が選んで、天子（自分の子供）として天下（世界）の支配権を全て委ねることにします。それを「天命」思想と言います。中国の支配者は皆、私は神によって選ばれた存在だから普通の人間とは違うということを主張しました。今も潜在的にそうです。つまり中国共産党のチャイナセブン、政治局の常務委員には神によって選ばれた存在だから大きな権限を持つのが当然だという意識が潜在的にあります。社会主義はまだ歴史が浅く、一方天命思想は中国で二千数百年行き渡っていますからこちらの方が断然強く無意識のうちに滲み出てくるわけです。

それからもう一つ、中華思想というのがあります。中国人には本来国家とか民族という考え方はありませんでした。「国家」とか「民族」という言葉は明治維新に日本人がヨーロッパの言葉を翻訳して作り出した和製漢語です。もともとアジアにはそういう言葉はないのです。中国人が使うのは「天下」だけでした。天下（世界）の支配者が皇帝です。そういう考え方がずーっと引き継がれてきました。そのために広大な天下を皇帝が住んでいる都を中心に区別します。徳と礼と法が整っているところが中華の地であって、そうではないところが夷狄という野蛮人の世界である、とします。すると中国の周辺は全て野蛮人であるということになってしまいます。特に、中国人の知らない海に住む者はひどい野蛮人であるということで、東の日本列島は「東夷」ということになりました。さらに夷狄の地を内臣、外臣、客臣に分けます。偏差値を付けたのです。中華思想と天命思想が組み合わせられて中国の宗教的な政治意識の枠組みができました。それは非常に根強い意識です。そこをまず理解しなければ現在の中国政権が分かりません。今日お話しするDNAというのはそういうことなのです。

支配者は自分が天の神から選ばれているのだということを常に意識します。そこで、民衆に対して自分は選ばれた人間であるという威厳を常に示さなければなりません。ですから非常に面子を重んずるわけです。支配者としての自分の立場が損なわれることが有ってはならないと考えるのです。そういうような目で今の中国の指導者とか北朝鮮の指導者を見ると納得がゆくとおもいます。

それから、都合が悪いと勝手に歴史を書き換えて来ました。例えば、永楽帝はクーデターで先の皇帝を殺して即位しますが、役人たちにその点を非難されると、歴史を変えてその3年間は皇帝が居なかつ

たことに歴史書を改ざんします。歴史は中国では支配者の都合の良いように書き換えられたのです。最近の例では、1979年の天安門事件で民主化の動きが鎮圧された後、当時の指導者の江沢民は歴史の見方を書き変えて、「これからは愛国主義教育の時代である」として社会主義から愛国主義（ナショナリズム）へ大きく社会認識の舵を切りました。1982年には中国の国内法として新領海法を作って「南シナ海は中国のものである」ということを国内の法律に記します。外国に対しては「中国の法律にそうあるのだからここは中国の核心的な利益である」と主張するようになったのです。その2年後には愛国主義教育が国の方針になってそこで抗日戦争が非常に強調されました。反日というのが中国の教育で重要なテーマになってきます。時代が変わる度に支配の方針で歴史が変わっていくのです。自分たちの支配を納得させるよう宣伝がされる訳です。

中国は「歴史の国」と言われますが、天にいる神の意志が人間社会のいろいろな変化や自然災害に示されると考えて、為政者が神の意志を知るために歴史研究がなされたのです。中国の歴史学者というのは天帝の意志の在り様を判断する神官だったのです。権力者に従う太鼓持ちのようなものです。だから中国の歴史は、我々の考えている歴史とは異なります。韓国ではどう考えているかという、清は女真人という外国民族によって支配されたことから正当な儒教の指導者の座を失った、これからは儒教の本家本元は韓国である、朝鮮王朝である、ということになりますから、中国よりももっとすごい歴史認識なのです。そこで大義名分、何が正しくて何が間違っているか、というようなことの宣伝に歴史が使われるようになっていきます。我々が知っている、社会がどういう風に変化して来たのかというような歴史では無く、ひとつの倫理的な解釈なのです。私たちはそういうものあまり馴染みがありませんが、それは文化の違いとして知っておかなければなりません。中国もその周辺の朝鮮半島の発想も強い癖があるのです。

3.

鄭和はイスラム教徒です。イスラム教徒がなぜ中国の皇帝に仕えたのでしょうか。その前にあった元という王朝は、西アジアから中央アジア、中国に至る、モンゴル人の大きな帝国の一部です。当時のイスラム社会では銀が非常に不足しました。商業が発達して経済規模が拡大したことから銀貨が間に合わなくなってしまったのです。そこでイスラム教徒は中国最大の銀産地の雲南に移住し銀を取るようになりました。鄭和はその子孫であり、中国人ではありません。その人が中国の皇帝に仕えて歴史に名を遺すことになるのです。

次にインド洋から南シナ海に至る海の歴史を簡単に話しましょう。750年に成立したアッバース朝は中心をシリアのダマスカスからイラクのバグダードへ移して新しい都を作ります。このバグダードは人口が150万人に達し、産業革命以前の最大都市でした。広い地域と商業を行います。牧畜民は穀物を作らないので商人に依存せざるを得ず、遊牧民が大きな力を持った時代には商人の力も一緒に強くなりました。もう一つ重要なことは、ペルシャ湾からインド洋に出ると非常に大きな海の世界が広がります。8世紀の後半から10世紀頃にかけてインド洋の世界が大々的に開けて行きます。この海は季節風と言いまして毎年定期的に東西の風向きが変わる風が吹いています。これはアラビア語ではモンスーンと言います。モンスーンとは「年中行事」という意味です。夏と冬で規則正しく風向きが変わるのです。それを利用して帆船の航海ができることとなります。

アッバース朝の時代にインド洋が開けました。北アフリカから今の南シナ海が一連の経済圏に繋がっていくこととなります。この時代に中国はまだ海に着目してはいません。内陸国家のままです。アジアの海の世界はイスラム商人が開いたのです。彼らは「ダウ」と呼ばれる三角帆の帆船を使ってインド洋をいったり来たりします。ところが、南シナ海にはもっと古い時代から海の貿易に特化した海洋民が住んでいました。それは、中国では「三仏齊」と言われる（シュリービージャヤとも言われる）王朝です。南シナ海とインド洋・ベンガル湾の間にはマラッカ海峡があります。スマトラ島のパレンバンがマラッカ海峡の貿易の中心でした。これはマレー人の王朝です。中国がこの南シナ海に進出するのはかなり遅れて10世紀後半になったのですが、その時に利用したのがこの三仏齊です。ですからマレー人が開いていた海の世界に中国人が参入して行くことになったのです。

東アジアから見ると、大きな海は南シナ海と東シナ海ですが、南シナ海は経済の海として西の方から

開けました。イスラム商人の後にはポルトガル人とかオランダ人のヨーロッパ人がやってきます。東シナ海はどちらかというと、中国の皇帝が支配していた政治的な朝貢の海で両者の性格が違います。中国が「南シナ海はもともと私たちの物であった」というのは筋が通りません。そんなことは決してないのです。それに南シナ海は地中海の1.4倍の面積です。今は世界の石油タンカーの半数以上が行ったり来たりする重要な海域ですから、これはまさに国際的な経済の海です。それを囲い込もうとする中国は海の歴史を全く分かっていないのです。世界の経済は、海をあらゆる国の商人が利用できる「公海」として発展してきました。それぞれの国の領海をなるべく狭くして「公海」を拓けることによって世界の経済を成長させようとする政策が一貫して取られてきたのです。そのところが中国人には理解されていないようです。

イスラム商品は博多にも来ていました。大宰府の鴻臚館といって外国の人を接待する建物があります。その遺跡を発掘したらイスラム商人が持ってきたと思われるガラス製品が出て来たのです。かつての平和台球場の外野席です。今でも展示されていますから実物を見ることができます。非常に古い時代にイスラム商人は日本について知っていました。9世紀のイスラムの著作には日本の事がワクワクの国として記されています。倭国を中国語で言うとワークウオになります。ワークウオだとおさまりが悪いので二つ続けてワクワクの国にしたわけです。ワクワクの国では金が有り余っている。例えばサル首輪とか犬の鎖は金で出来ている、金が余っているからそれを糸にして織物に縫い込んである、そういうふうにかかれてあります。奈良の大仏が出来た時に大仏を金メッキするために金探しが行われ、仙台の近くで砂金が発見されました。その砂金が都に集められ、遣唐使が長安の都に滞在するときの滞在費用として使われたのです。当時中国では金は珍しかったので日本は黄金の国だということになったようです。

モンゴルの時代になりますと、今度はマルコポーロが中国に行きます。マルコポーロは日本のことを黄金の国、ジパングと伝えました。日本という字を中国語で読むとリーペンになります。南へ行くとジーペンになって、ジーペンがジパングになりました。その噂が広まり、一山当てようということで今度はコロンブスが大西洋を横断してアメリカ大陸に至ります。というように歴史が繋がっていくのです。唐代にイスラム商人は大活躍をして中国の絹とか焼き物を求めて広州にやってきました。広州にはその当時のイスラム商人が使ったモスクが今も残っています。イスラム側の記述によると、イスラム商人などが12万人ぐらい広州に住んでいて、かなり大規模な貿易が行われていたようです。

ところが黄巢の乱という大農民反乱が起こって広州が略奪されました。たくさんの人が殺されて、これでは中国は危ないと言うことで、イスラム商人はマラッカ海峡へ本拠地を移します。そうすると空白となる海域ができます。そこで、マラッカ海峡と中国南部を結んで中国商人たちが活動を始めるようになるのです。彼らは「ダウ」を真似して「ジャンク」という外洋船を作り東南アジアに進出します。そうして中国商人とイスラム商人がアジアの海の支配を分け合うようになっていきました。

4.

その後、中央アジアの遊牧民の力が強くなってユーラシアがモンゴル人によって統合され、モンゴル帝国ができます。彼らは巧みに馬に乗り、騎馬軍団によりアジアを征服して大帝国を作りました。遊牧民のモンゴル人も商人と密接な関係にあります。自分たちの欲しいものは商人が持ってきてくれますから、商業が大いに発達したのです。その結果、大草原を使った商業と「海の道」を使った商業が一つに繋がりに、ぐるぐる回る一つの経済圏ができ上がったのです。それがアジアの円環ネットワーク、陸のルートと海のルートが一つにつながったネットワークということになります。それが実はアジアの商業の全盛期なのです。モンゴルの時代にアジアの商業の一つの頂点があったのです。

イタリアルネッサンスの初期に活躍したジョットという人が描いた、キリストが磔にされる絵があります。絵の中の衣装の裾に書かれている文字が実はモンゴルの公用文字だったパスパ文字です。パスパ文字はチベットで使われていた文字ですが、それがジョットの絵に描かれているのです。イタリアにもモンゴルの影響が及んでいることが分かります。

その他にも、文明の交流がたくさんありました。例えば、このモンゴルの時代に、火薬がヨーロッパに伝えられてそれが「鉄砲・大砲」に利用されて行きます。それから羅針盤という地球の磁極を示す測定道具が伝わり、ヨーロッパ人は初めて陸地から離れて大海原を航海できるようになります。羅針盤が

無ければ大西洋は横断できませんから、モンゴル帝国が無ければコロンブスはいなかったこととなります。また官僚制で発達した中国は昔から受験の国です。科挙という試験制度があって、それに通らなければ高級官僚になれませんでした。ですから支配層が勉強したわけです。私立学校もたくさんできました。テキストを最初は手書きにしていたのですが、やがて活字を組み合わせて本を作ります。ところが漢字は5万もあるので活字を選ぶのが大変です。それがヨーロッパに伝わると、アルファベットで字数が少ないために印刷術が発達してヨーロッパの文化レベルを上げる要因になりました。ですからモンゴル帝国というのは、文明的にも重要な意味を持った帝国であるということになります。

当時の商人たちが行き来したユーラシア商業ルートには、中心になった都市が4つあります。一つは中国の北京、当時は大都と言われました。これはフビライが作った都市で、モンゴル高原と中国の境界にあります。北京郊外の八達嶺という万里の長城に登ると天気の良い時にはモンゴル高原が見えます。モンゴル人が中国人を威圧するために作った大都市なのです。それから、イランのタブリーズというところにイル・ハーン国の新しい主都が築かれます。この二つの都市をつなぐのが「草原の道」です。海のルートとしてはペルシャ湾の入り口にあるホルムズという港町が成長します。もう一つは台湾海峡、今の福建に当たりますが、その泉州という港町が発展しました。今で言うとシンガポールのような国際港市です。イスラムのモスクやヒンズー教の寺院、またカトリックの修道院もありました。この4つの都市を結ぶ形でモンゴルの経済が回転して行きます。

マルコポーロの記述によると、泉州（当時はザイトゥーンと言われていましたが）は世界の二つの大きな港町の一つであり、アレキサンドリアというエジプトの都市よりもたくさんの商品が集まってくると述べています。イブン・バトゥーダというモロッコの大旅行家もそのように言っています。モンゴルの時代には、インドの南にクイロンという港町がありますが、そこから東が中国商人、西がイスラム商人の縄張りとして二つの商業世界が結合していたのです。中国の歴史では珍しく海の世界に中国商人が大量に進出してイスラム商人と共に大きなアジア経済を作って行った時代なのです。中国の国際化が進んだ時代と言えます。

5.

モンゴル帝国が崩れますと、新たに二つの大きな帝国が競い合うようになります。一つは明帝国です。中国の農民がモンゴル人の支配に対して紅巾の乱という反乱を起こして、その反乱軍の中から朱元璋という貧しい農民が頭角を現し、その人が皇帝になって明という国を作ります。明は、モンゴル人の国際的な経済世界はだめだ、中国人の伝統的な社会に戻ろうと主張します。復古的で中国を縮小させた王朝が明なのです。その政策は、一つは「海禁政策」、海外交易を禁止する一種の「鎖国」政策です。中国の商人は海へ乗り出して貿易してはいけないとしたのです。貿易を政治的な朝貢貿易に代えます。中国の皇帝を神（天帝）の代理人として、周りの支配者の地位を認めて一つの国際社会を作ります。将軍の位とかそういうものを与えて自分に従属させたわけです。支配者として認められた人たちは貢物を持って一定期間毎に皇帝のところへやってきました。それに対して皇帝は体面がありますから、それに10倍するぐらいのものをお返しとして与える。そういう貿易を「朝貢貿易」と言います。

その貿易が日本史の教科書に出てくる「勘合貿易」です。商人は「私は日本の国王の代理人です」というのですが、証拠に割符が必要としたのです。中国の皇帝の代替わりごとに一東の勘合府（割符）を周りの国に与えます。中国の港に半分の割賦を置いて、それが符合すれば正式な使節として認めました。それが勘合貿易です。勘合貿易は朝貢貿易であり、皇帝と周辺の支配者が親分子分の関係になるということです。日本でそれを積極的に求めたのが足利義満です。当時は日本ではそんなに金が取れなかったのですが、義満は金閣寺という金ぴかな建物を作ります。そこで明の使節を接待し、日本国王の印という重くて持てないような金印を与えられて明の臣下になります。足利将軍は手に入れた勘合府を博多の商人とか、堺の商人に売ったのです。幕府の収入源にしたのです。モンゴルの時代には非常に大規模な商業が行われて、アジア経済がヨーロッパをリードする状況があったのですが、それを明は復古的政策でだめにしたのです。明は商業社会から身を引いて伝統的農業社会に戻ろうとしたのです。

それに対して遊牧トルコ人が反発します。シルクロードの中心地の西トルキスタン、今のウズベキスタンにトルコ系遊牧民が拠点築いてティムール帝国を作ります。ティムールはモンゴル人の支配者の

子孫を担いでモンゴル帝国をもう一度立て直そうとしたわけです。どっちかと言うとティムールが優勢だったのですが、イスラム世界の各地の支配者を手なずけるのに時間がかかってしまいます。明と戦えるような体制ができた頃にはもうティムールは年を取り、酒を飲みすぎて、自分の力では馬にも乗れないような状態だったのです。それでももう一度モンゴル帝国を作ろうとして明への遠征を行います。その時の明の皇帝が永楽帝です。ティムールは 20 万の軍隊と、その食糧の羊を用意、大軍勢で明に押し寄せようとしたのですが、体力的にそれは無理でした。結局ティムールは自分の領地を出る前に熱が出て亡くなり、モンゴル帝国を再建できませんでした。ティムールが亡くなったのが 1405 年、足利義満が日本国王として明に認められたのが 1404 年、鄭和の遠征が始まるのが 1405 年、こうしたことが同時期に起こっているのです。

6.

鄭和は身長が 180 センチぐらいある頑丈な人だったとされます。12 歳の時に雲南が明の軍隊に攻撃されて捕虜にされたイスラム教徒でした。当時の中国にはたくさんのイスラム教徒が居ましたが、明の人たちは、在留外国人（「色目人」）は中国社会をだめにするから子孫が増えない様にしてしまおうということで、12 歳の少年の鄭和は宦官にされてしまいます。そして北京に送られて永楽帝に仕えることになりました。ちなみに当時は大変な時代でした。雲南の風土病がペスト、黒死病です。モンゴル人が各地を支配するルートに乗ってノミがペスト菌を広めました。モンゴルが亡びた時期に中国ではペストが流行りましたが、それがヨーロッパにも飛び火します。ヨーロッパでは 100 年戦争の初めの頃、14 世紀にペストが流行りますが、それは中国の雲南地方から中央アジア、黒海、地中海を通過してイタリア半島に至りヨーロッパへ広がったものです。国境とか民族とかいろんな形で歴史を区切りますが、疫気はそれには関係なく広がりました。世界は一つに繋がっているのです。世界史には地球全体を見る感覚が必要です。一部分だけを見ても世界の歴史は分かりません。

鄭和は何をしに行っただのか。鄭和の遠征は 7 回にわたり行われました。この遠征は中国の皇帝の体面もあり、大変に派手なものになっています。航海に 200 余隻の船を連れ、乗組員が 2 万 7 千人から 8 千人ぐらいと言います。こんな大規模な航海は昔の海の歴史にありませんでした。コロンブスが新大陸へ行った時には 90 人から 120 人、そんな規模です。船もそんなに大きくありません。ところが鄭和の艦隊は 2 万 8 千人です。役人や軍人をたくさん乗せた儀礼的な航海だったのです。周辺の国々を威圧する為の航海だったのでしょう。

南京の造船所の跡地から鄭和の頃の木造船の一部が出て来ました。人間の背丈の 3 倍もある大きな舵です。それから類推してこの遠征には数千トンの世界最大級の木造船が使われたようです。それを「宝船」と呼びました。そのほかいろんな船を混ぜると 200 隻ぐらいの艦隊になったようです。ところがそうした大船団の派遣は中国の歴史書には全く出て来ません。歴史から抹殺されてしまったのです。何故かと言うと、航海は永楽帝がやった壮大な無駄遣いで、国家に大変な支出を強いました。しかも、やったのは役人と対立する宦官なのです。永楽帝が個人的な召使を使って行ったことですから役人は面白くないわけで、二度とこんなことが行われたい様にと関係書類を全部焼き捨ててしまったと言われます。ですから、長い間幻の大航海だった訳です。昔の教科書にはほとんど出て来ませんでした。それを丹念に調べて資料を収集してこの大航海を復元させたのが現代の中国です。最初にそれをやったのは中国のグローバル化を歓迎した学者たちですが、後になって国が国威発揚に切り替えました。鄭和の遠征を宣伝することによって中国は昔から海の大国だったというイメージを作り、南シナ海を囲い込みます。習近平がオバマに言ったように太平洋の半分を支配する海洋帝国の歴史的根拠にしようとしたのです。

7.

鄭和の航海なのですが、第一回が 1405 年の 6 月 15 日、目的地はカリカット、これはバスコダガマが行ったところと同じなのですがインドの胡椒の積出港です。胡椒の買い入れに行ったわけです。そして帰ってきて第二回は一年後の 1407 年の 9 月 13 日に命が下ります。第三回は 1408 年ですから一年に一回ということになります。つまり船団は国営貿易として買い出しに行ったわけです。海外貿易を禁止にすると商人が東南アジアの物産を持ってこなくなりました。ところが寺院や宮廷では香料、香木、薬剤が必要になっていました。鄭和はそれらを買集めに行ったわけです。ですから三回目までは目的地は

同じです。四回、五回、六回、この3回が問題になります。四回目の遠征が1412年ですから三回との間は数年空いています。かなりの準備をして行われた遠征なのです。目的地もインドから西アジア貿易の中心のペルシャ湾口のホルムズに伸びていきます。また分遣隊はメッカにも東アフリカへも行っているのです。

明らかに目的が変わったのです。明の皇帝のもとに朝貢する使節の募集の航海だったのです。勘合貿易で中国の皇帝に従った国は15か国だけでした。永楽帝は前帝を殺害した評判の悪い皇帝でしたから、何とか評判を回復するには、地の果てから皇帝の徳を慕って雲霞のごとく使節がやってきて欲しかったのです。ですからこの大きな船団の使命はたくさんの朝貢使節を連れて帰ってくるようになったのです。鄭和の遠征の効果で60か国が明に朝貢することになりました。それはアフリカとかインド洋周辺からの使節には勘合符はいらない、その国の支配者が証明する書類を持たせればそれで使節として認めるといふことにされたためです。書類があればだれでも朝貢使節ということにされたのです。永楽帝の評価を高めるための政治的な航海となったのです。

特に永楽帝が求めたものは珍しい動物でした。アフリカからはライオンとかアラビアからはアラビア馬とか、中国にいない動物を連れて来て民衆に見せ、地の果てからの使節が連れてきたのだとして評判を高めようとしたのです。特に話題を呼んだのは東アフリカのマリンディからもたらされたキリンでした。南京に陸揚げされて北京まで大行列で運ばせたのですが、民衆が非常に驚いたというのです。麒麟は、キリンビールのマークに出ている麒麟ですが、皇帝の支配がうまくいったときに天にいる神が遣わす神獣とされていたからです。そういう形で永楽帝は偉大なる皇帝のイメージを演出しました。

そのように鄭和の大規模な航海は我々が考える商業では無く政治的な航海、永楽帝の権威を高めるための航海でした。大航海の割にほとんど成果を生まなかったのです。言ってみれば、永楽帝の面子を立てるための航海だったのです。それと比べると、それから数十年後に行われたコロンブスの航海は、乗組員がたった90人で、しかも人が集まらず20人ぐらいは航海が成功すれば罪が許される罪人でした。当時の歴史を考えると、今の世界地図とは異なって歴史の舞台はアジアとヨーロッパだけでした。大西洋と新大陸はまだ闇の中だったのです。そういう闇の世界を新たに世界史に登場させた、そしてそこから資本主義経済が育ってくるわけですから、コロンブスの航海のほうが余程世界の歴史を変えたということになるのです。ですから規模の大きさは歴史的評価と関係がありません。

「鄭和の航海は非常に大規模であり、中国がもともと海の国だった証拠だ」と中国は主張しますが、それは根拠にはなりません。中国はもともと内陸国家であって「海の国」では無い。例外的に中国人が海外進出したのは外的な要因が働いたからで、イスラムの時代とモンゴルの時代だけです。それが明の時代になると夕日が沈むように海外との貿易が衰退していきます。そういう変り目にちょうど鄭和の艦隊が組織されたということなのです。だからあれは落日の美しさみたいなものであって、次の歴史には繋がって行かない大事業だったわけです。

おわりに

永楽帝は都を南京からモンゴル時代の大きな都市であった北京に移しました。これで世界の支配者になれると思ったのでしょうか、たまたまの落雷により移ったばかりの北京の宮殿の主要な建物が三棟焼けてしまいます。信心深い明人は、それを永楽帝に対して天帝が「ノー」の判断を下したと見なしました。永楽帝はガックリきて、一挙に老け込んでしまいます。もともと体があまり強くなかったのですが、「私は偉大な支配者であり、農耕社会と遊牧民の社会を支配する。」ことを示すために、帝は3年間連続でモンゴルに遠征します。しかしモンゴルの軍隊と戦うのは嫌なので、モンゴル高原へ行ってモンゴル軍とは戦わずに帰ってきました。アリバイ作りの遠征だったのです。3回目の遠征中に永楽帝はモンゴル高原で病気になり亡くなりました。

鄭和は見方によっては大変な業績を残したのですが、その終わりは非常に惨めでした。どこでどのようにして亡くなったのかが記録に残っていないのです。6回の航海が終わった後、永楽帝が亡くなって、明に来ている使節を送り返すためにもう一度航海をやるのですが、その航海を終えた後どうなったのかよく分かりません。お偉いさんの名前だけ残って、庶民はどうなったのか分からないのが中国の歴史なのです。それが鄭和という人の一つの人生であった、ということになります。

そうした伝統を引き継ぐ中国のナショナリズムは普通の国のナショナリズムとは違います。中国の支配者（皇帝）が天下つまり世界を支配するというような考え方が今でも引き継がれていますから、どうしても他の国への干渉に繋がるのです。例えば「一帯一路」です。ユーラシアでは、ロシアが非常に貧しくなってきました。プーチンが頑張っていますが、それはロシアが貧しいからです。ロシアの GDP は韓国の次で世界で 11 番目になってしまいました。周辺地域が独立したので人口も減り、日本より一千万人ぐらい多いだけです。でも面積は日本の 45 倍ありますから、限界集落だらけなのです。中央アジアもロシア帝国の時代や旧ソ連時代とは異なり、手が及ばなくなりつつあります。そこに鉄道を作っ

て中国が取り込んでいこうとするのが「一帯」です。もう一つは昔、フビライがやったように沿岸地域に海のネットワークを作っ

て行こうとします（一路）。中国自体が非常に貧しい人が多くて混沌とした状態にあるのですが、それでも中国は膨張を図り世界の支配者であることを誇示しようとしています。それが中国の固有のナショナリズムのパターンです。

鄧小平と周恩来は第一次世界大戦のあと、勤労学生としてフランスのルノーの会社で働いてきたので、ヨーロッパ体験があって世界の様子が分かるのでしょうが、毛沢東とか習近平は伝統的枠組みの中で生きて来ました。そういった点でこれからどうなるか、古いものがじわじわと滲み出てくるのではないかという不安があります。多くの民衆の意識もそうしたレベルなのです。

我々は幸いにも戦後の教育があって民主主義というものを多少理解するようになっていますが、アジアの国々のほとんどはまだ意識改革が進んでいません。そういうものを行き届かせる努力が我々にとって大切になると思います。植民地が無くなればアジアが理想的な状態になるというのは多分間違いであって、そうはならないのではないか。もしかすると今よりもっと悪くなるのかもしれない。そういうふうにも思われます。ヨーロッパもアメリカも頼りなくなってきましたから、アジアの意識を変えて行くことがとても必要になってきたと思います。現在は、そういう時代にさしかかっているのではないのでしょうか。

[質疑応答]

Q：最近の世界のトップリーダーは大東亜戦争時代から比べると皆劣化していると思います。日本の国民の中には軍備を論ずるとすぐに戦争になるという人がいますが、本当は違うと思います。チャーチルとかアイゼンハワーとか戦争を経験した昔のリーダーは、「戦争は怖くてできない」と言ったのですが、今のリーダーにはそのような人たちはいない、戦争の怖さを知らない素人がリーダーをやっている。鄭和の時代から考えて、今の状態を先生はどう思いますか。

A：第一次世界大戦が始まる迄の 19 世紀、ヨーロッパではナポレオン戦争後に戦争らしい戦争をしていません。そこで、戦争が始まっても大したことはないだろうと思って第一次世界大戦を始めたのですが、武器が進歩していましたから、とんでもない大戦争になりました。ヨーロッパは没落し、それまでとは比べものにならない死者が出ました。今は生まれれば核戦争ですから、その比ではありません。人類の破滅です。そこはきちっと抑えなければなりません。最早、世界戦争は出来ないのです。核の傘で世界を動かそうとする発想自体がもう行き詰まっているのです。そこをよよく考えなければならぬと思います。鄭和に聞くまでもありません。

Q：黄河河口に土砂が堆積して海へ出られず、黄河文明は内陸文明になってしまったとのことですが、ナイル河やメソポタミアとかインダスは土砂の堆積は無かったのでしょうか？

A：堆積の程度が違います。黄河の場合には黄砂の大地を流れて来ますので、泥が水よりも多いぐらいで、堆積が速くすぐに川底が高くなります。黄河文明はいくらか雨が降ります。毛細管現象で地下水が上がってきますので治水灌漑もあまり必要ありません。メソポタミアとかエジプトは大規模な治水灌漑の為に土木工事が必要でした。そこから国のもとが作られてくるのですが、中国の場合にはそういうのがありませんから、家族中心になって力の強いものが地域をまとめて行きます。強い人たちが互いに争って長い年月をかけて支配者になって行く。例えば、春秋戦国時代は戦争が何百年も続きました。そして最後に勝ち残ったものが「神の代理人」と称して天下を治めます。それが例えば始皇帝なわけです。ところが彼らは支配者になると、自分たちは徳があるから選ばれた、戦争で支配者になったのでは

ないと言いはじめます。そして学者がそれを補強します。そういう偽善に満ちた歴史が中国の歴史なので、戦争で支配者になりましたから、治水灌漑と違ってギブ・アンド・テイクの関係がありません。一方的に民衆を支配することになったのです。だから中国の歴史の嫌なところは支配者とその取り巻きが大きき力を持って一方的に民衆を支配するという点です。民衆の方はそれに対して闇経済とか闇組織で対抗するしかありません。ですから儒教は聞いていると素晴らしいのですが、儒教を学んだ彼らがやっていることは、全然違います。建前と実態は全然違うのです。そこが問題だと思います。

Q：習近平政権と一帯一路構想を、世界的にみて先生はどのようにとらえていますか？

A：習近平は伝統的な物の考え方を強く持っている人です。彼の頭の中では、アヘン戦争で中国は大きなものを失った、それを復興させようとするところに力点が置かれています。中国内部をどのように作り変え社会矛盾を解決するのかでは無く、かつての栄光をどういうふうに復活させられるかということに力点が置かれていますから話が難しくなっています。そういう意味で、彼は権力者であって改革者ではないと思います。中国には二つの中国があります。堅くて旧態依然とした中国と、変わろうとする中国と、どちらかというとな習近平とか毛沢東は古いタイプのような感じがします。

宮崎 正勝（みやざき まさかつ）先生のプロフィール

東京都出身、東京教育大学（現：筑波大学）文学部史学科卒業
都立三田高校・九段高校・筑波大学附属高校教諭（世界史担当）
筑波大学専任講師 北海道教育大学教授
NHKラジオ・テレビ「高校世界史」専任講師
文部科学省高等学校 地理歴史科 学習指導要領作成委員会 主査
高等学校教科書「世界史B」の編集に20数年携わる
世界一周クルーズ船（にっぽん丸、パシフィック・ビーナス）世界史講師
現在はNHK文化センター、朝日カルチャー・センター講師 著述業

主な著作

『鄭和の南海大遠征』・『ジパング伝説』（以上中公新書）
『海図の世界史』・『「空間」から読み解く世界史』（以上新潮選書）
『イスラム・ネットワーク』（講談社選書）
『グローバル時代の世界史の読み方』・『黄金の島ジパング伝説』（以上吉川弘文館）
『海からの世界史』・『世界史の読み方』（以上角川選書）
『世界史の海へ』（小学館）
『モノの世界史』・『文明ネットワークの世界史』・『ザビエルの海』・
『風が変えた世界史』・『北からの世界史』・『「海国」日本の歴史』（以上原書房）
『知っておきたい食の世界史』・『知っておきたい味の世界史』・
『知っておきたい酒の世界史』・『知っておきたいお金の世界史』・
『知っておきたい食の日本史』（以上角川ソフィア文庫）
『早わかり世界史』・『地図と地名で読む世界史』・『世界史を動かしたモノ事典』・
『中東とイスラーム世界が一気にわかる本』・『世界全史』・『世界〈経済〉全史』
（以上日本実業出版社）
『モノからよみとく世界史』（大和文庫） など